

中国・近畿

それから上人は大谷師をしたがえて九州を去り、八月一日より広島心行寺に五日間のご教化があつた。

広島高等師範学校でもご講演、教育と宗教の連絡はいつも上人の唱えらるる所で、かかる機会を非常にお喜びになつた。

一日大田氏が「目下の重大問題たる労資の争いは将来いかに解決されるものでしょうか」とお尋ねすると、

上人「労働者より資本家が早く目覚めるものでしょう」。

氏はまた「かかるいやな争いはなぜに起るのでしょうか」とお尋ねすると、

上人「世の中の進歩の道程としては止むを得ない事実でしょう」。

また「仏とは自覚ある大常識者です」。

親子実感

この心行寺の会座には当時すでに布教界の雄将であつた山口の熊野宗純師も参加。初めて上人の「おかしがたき崇高の人格と、慈悲あふるる温容に接して、

一種のいい知れぬ充実味を心の奥底に覚えた。」上人は至極簡単に「あなたはこれまで如来様を親様と呼んだことがありますか」、師「はい、いつもそう申しています」。上人「それでは、あなたは、如来様をあなたを産んで下さった母のように思いますか」。師「いいえそうは思われません」。上人「それではなんにもなりません。真剣に念仏してご覧なさい、きっとそう思われるようになります」。

上人のこのなんの理屈もない事実そのままの簡単な言葉を伺った時、師は「腹をえぐられたように感じ、長い眠りから目ざまされたように感じた。」今まで師が名匠碩学について学んだ宗乗も、それは「空なる冷やかな知識で、如来様はガラス戸棚の中のお人形様のように血の氣のない冷いもので、罪に泣いている者みづからを抱きしめて下さる温い親様とは実感せられず、醍醐味のはずの念仏は無味乾燥で、微妙莊嚴の浄土も架空の妄想のように感ぜられてならなかった」師は、上人五日間の熱火のごとき提擲^{せし}によりて、信心喚起し、聖教に対する一隻眼も開かれて「上人を如来の顕現と仰ぐ」ようになって、念仏に精進し、特に「聖教の文々句々が文字通りにうなづけるようになったことも、大なる喜びで」ますます仏道のあゆみを進めた。

またこの会座にはすでに教壇の雄将であった筑前の中川弘道師もまた参加した。初対面の挨

拶から意表の外にでたる上人の光に触れて、かねて大谷師より聞きしにまさる靈格の尊さにひれ伏し、帰依渴仰の思いをもって、お導きを頂くようになった。



聖者大正7・8年の頃

中国より東上、八月六日

大阪府下豊川村笹川市兵衛

氏方ご一泊。この会座では

辻田忠兵衛氏、徳永あい子

女史もはじめて上人に相見

して帰依深く念仏精進する

ようになった。

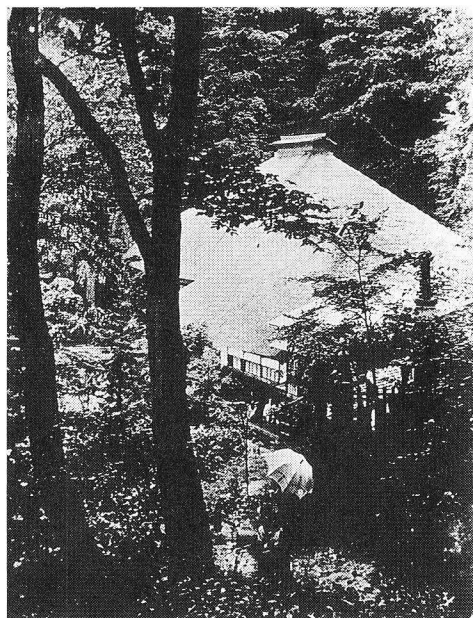
次に播摩垂水の大谷象平

氏別邸にて五日間、三相五

徳のご法話があつた。

唐 沢 山 別 行

それから名古屋、その他ご結縁後、八月十八日より信州上諏訪唐沢山阿弥陀寺の第一回別時念仏会をご指導になった。



唐沢山阿弥陀寺

山は昔、彈誓上人修行法窟のあと、三面山を負いし数千尺の高地、奇巖屹立した間に、鬱蒼たる古木に囲まれた古い藁葺の阿弥陀寺が、ただ一軒全山寂寥の幽境を領し、澄みきった高原の青空を夏の日が白く光って、遙かに見下す諏訪湖の鉛色の水面には木の葉に見ゆる舟をちらしている。

肉眼に映ずるこの景色にのみ

見とれて、開法眼の意樂いざようをはなれていた侍者に、上人「日想観と水想観に適した土地ですね」。

別時結衆二十余名、九州より大谷師、中国より佐々木師の随行あり、自行のかたわら上人の化益を扶け、午前、午後各一回、難思光、無称光につきてのご法話、夜の質疑、三食の外は不断の念仏で、二十四日結願となった。

前から寺に止宿して勉強していた高橋猪久次氏（後判事）、柴武三氏（後弁護士）らもこの勝縁に会って信心喚起し、その後ずっと勇猛に念仏するようになった。高橋氏のごときは「理屈はいらぬ。念仏しよう。そして光明が頂けるといことが嘘だったらその時止める」と始めから単信直入、上人の前にひれふした。結衆の中には前の六日間はどうしてもお話のみ込めず、ありがたくもなかったのを辛抱して念仏していると七日目に、大谷師の一寸した手引きをうけて信心喚起し、それからずっと熱心に念仏するようになった人もいた。

それから上諏訪正願寺、次は飯島のご縁故深き塚田師の住職する称故院にご巡教後、武州八王子極楽寺に二三日ご留錫、大勢の参詣者に一々名号を仏の字より逆に書き与えらるる等、いつものごとく、それから下総松戸の会堂でご布教、かたわら画会の仏画に忙しさをきわめ、九月初旬東京に入られた。

法語

「この心の外に往生する体なし。この心の外に成仏する体なし。一心に念仏して弥陀と合一す即ちこの心なり。一心に仏を念ずる故にこの心即ち仏となるなり。されば觀經にこの心仏と作る、この心これ仏なりと。往生ということは死ぬことにあらず。弥陀に助けられすがたなり。弥陀に助けらるるというは、弥陀の光明を獲得したることなり。光明とは如來の靈體なり。靈體即ち本願力なり。本願力とは念仏なり。」

「よしや、病氣のため、からだは一室をでることできぬとも、心は十方界に照りわたる」。

「永觀律師は、天子様のご戒師になりなされたおかたであつたけれども、平生ご病身であつた。それにつき自ら云いなされた、病は善知識である。全く自分の信仰の強くおこつたのは病氣のためであつた。ために無量永劫たすかる心のおこりしも病氣の故とおもえば、病氣も恩寵である」。

「たとえ榮華の中に、百歳の壽命をたもつとも、もし心靈にうるわしき実りなからば、またなんの詮かあらん」。

「天を恨めしく思うこともあろうが、大なるみ親のみはからいは、知恵なき子らのはかり知るところでは無い」。

「二日のうち、たとえ一度たりとも、家族そろつて讃礼し、称念することにつとめ、あとは常念につとむるようにするがよろしい」。

近畿・中国

九月東京より東海道所々ご結縁後、月末摂津豊川村法藏寺、笹川氏方、稲村氏方、極樂寺、六甲の島氏方等ご巡教。極樂寺住職清崎専成師帰依厚く、至誠念仏の余薫は村内を徳化した。

法藏寺では、京都の恒村京八氏と帝大工科講師の中井常次郎氏が初めて上人に相見した。これは先に中川弘道師知恩院布教中、恒村夫人がまず師の勸化を受けて上人と光明主義を求むるようになったのが縁となりて、師の案内にて恒村、中井諸氏の受教となった。

九月三十日、初謁見の科学者中井氏はすべて今まで聞いたことのない条理整然たるお導きに全く敬服して、「磁石に引きつけられた鉄片の感」がした。

恒村京八氏夫妻、中川師と離れの方で雑話をしている所へ、上人みづから果物籠をさげておいでになり、「質問があれば承りましょう」。かねて所証の理体が法身、能証の果体が報身と鵜呑みにしていた恒村氏は、上人の説かるる法身が一大人格のようなのに不審を抱いたものの、突然の上人のご入来がもったいなく、ただ茫然としてなにをお尋ねするあてもなく黙している。と、上人「ああ法身報身応身のことでしたね」と心中をさされて、しんから頭が下がった。そ

の時ふと心に浮んだ疑問、「上人様、如来様という方はほんとうは姿も形もましまさないのです、それが形として現れてみえるのは自分の人格を通して如来をみるために、如来様が姿があるように拝めるものではありませんか」とお尋ねしたら、

上人「いいえ、如来様は主観的客体ましまに在す」。

この一語で恒村氏は、従来の見解が微塵に碎かれ、「如来は主観の牢獄をでて拡がり給う」と幾億由旬、驚心駭目がくもく、見上ぐれば上人は光顔巍々として、慈愛のほほ笑みをたたえ「ておられる前にひれふした」。

かくて京都では恒村氏夫妻、中井氏、徳永女史等、上人に帰依して勇猛精進の念仏行者となり、光明主義の火の手が燃え上る機縁が開けた。

それから十月十一日より五日間、山口県屋代西蓮寺に佐々木師随行にてご巡錫。住職藤本浄本師はかつて宗教大学に教授したる宗乗学者、四十二歳の初老記念としてこの法会を催し、かねて浅井師より噂を聞いていた上人を招待したのであった。

上人はいまだ面識もなかったが、ともかく寺のある大島から山陽線の駅までお出迎えした。プラットホームでお待ちしていると、予定の列車が着いてその三等車より下車した一人の出家、

「おん身より靈氣を放ち、涼しいいきいきした光が、おん身の周囲一問四方に輝いている」のを拝して、師は自然と低頭合掌せずにはいられなかった。これが年来敬慕せる初見参の上人であつた。師は

「この靈氣に触れて恍惚こうこつとして酔うたよう」になつた。

馱から大島に渡る船をまつわづかの時間にも上人はもうご法話があつた。「極樂は奇麗でしようね」ときく人に、上人「ハイ奇麗です」、そこで「地獄は恐ろしいでしようね」と尋ねれば、

上人「私は地獄の方には心をかけた事がございませんので、地獄のことは知りません」。

瀬戸内海の秋の海に、あちらこちらの島山が澄みきつた青空を背景に美しく浮ぶのをさして、「あそこらは極樂に見えるでしようね」と申し上げると、

上人「いえ、やはり島に見えます」。

海を渡りて大島につき寺に入られた。随行の佐々木師が前席を勤めることになつていた。思うところあつてか、上人は「佐々木さん、やわらかにお説きなさい」と注意された。伝統の宗乗に対する対機のお指図であらう。かくて日々上人はこの精勵な篤学者に自内証の生命を注射された。

万巻を読破したが、いまだ具現された人格に接する機会なかりし過去の淋しさに引きかえて、

「浄土の実在も、弥陀の存在も、光明も、救済も、ないし一切の仏法が体现されている」法的身たる難値難遇の大善知識に値遇した師は、一日と上人の所説に傾倒した。

つづいて十月十六日より二十日まで広島に近き廿日市潮音寺で別時ご指導。会は佐々木師の主催にて、これには中国では熊野、藤本、中山諸師、九州からは丹波、橋爪諸師を始として、「聖母」と綽名された篤信者荒巻くめ老嫗も参加した。それに上人はわざわざ関東より笹本師まで喚びよせられ、念仏三十七道品につきお話し下されて、すこぶる緊張した別行であつた。

見仏問答・普遍摂取

質疑に答えて、

「もし見仏といわば相好色身を見るものにかぎらず、広き見仏の、あるいは明相また瑠璃宝地、また華等の色相、あるいは慈悲に対する感激のごときも、発得の分と見る時は、必ずしも見仏難きにあらずと存じ候。……」

見仏には二の義ありて念仏者の宗致となす所なり。一には見仏は念仏者の全生命の復活したる徴候としてあらわる……念仏者心眼開きて仏を見るとはこれ霊的生命の発達したる兆候である。……

二には、実には仏は見える見えざるにかかわらず、如来常に行者の真正面に在ますとの信念が最大事にて候……見不見にかかわらず、われ如来とともに在りとの確乎たる信念こそ、宗教の第一義にて候。

光明主義

見仏ありがたく候えども、世にもし見仏せざれば往生できぬとか、また現在より如来とともに在る如来光明主義とは、見仏以後にあらずやとの疑いのために、光明主義は普遍的に一切衆生を摂取する能わず、との疑惑を招き候により、

見不見にかかわらず、光明生活をもつて、如来によつて活きたる信仰、という主義なれば、すなわち一切を普遍的に念仏三昧をもつて光明に摂取し、光明生活をもつて、一切とともに現在を通じて永遠の光明を期する安心をたつる主義、とせば、普遍的に行わるるものと信じ候。よつて見仏をおもてに表わさず、光明主義を標榜して、すべてを摂取し大ミオヤの慈光に接することを願わしく候」。

頂は高く雲表に聳え、麓は広く一切を載する富士山のごとく、三昧証入の頂と、万機普益の麓とに、いづれの一にも偏せず、二を含んで一に立つ中道に在りて、随類応機の法輪を転じ、「普遍的に」定と散と

利と鈍とのあらゆる機根の「すべてを摂取」するのが、上人の光明主義であつた。それが伝道の普及とともに導かるる機類が多様となるにしたがつて、ますます鮮やかになつた。

それから東上、東京にて例会ご指導、転じて十月二十五日、信濃上諏訪の正願寺にご巡教になつた。

多田助一郎氏松本より参詣、初対面にもかかわらず午前中三時間ばかりも一人のためいろいろと質疑を解いて下さる間に、土地の信者たちが何うと、一々法衣の袖をかき合わせて合掌し、響く低い声でお十念を授けて下さると、ひれ伏してこれを頂く態度の敬虔さ、特に目の不自由な一人がひとしお帰依の様子にて、しみじみとお十念を頂く気色のいかにもありがたいのに、同氏は「感到打たれて涙の溢れでるのを辛うじておさえ、もう理屈もなにもいらなくなつて、質問を打ち切つて」しまつた。本堂にでて莊嚴な仏前で光るお頭を、心もち右曲りにして念仏なさる上人の後姿を拝して、今までしんからの念仏はした事のない氏も、わけなくありがたく声を和して称名してゐると、涙がこぼれて止めどなく、お説教もなんだか夢心地で、ただ温かい気分の中に承つた。

上諏訪がすんで上人は越後へ向わるる汽車のお伴をする松本までわづかの時間の間もご法話つきず、讃礼のあげ方など教えて下された。お別れしてお姿の見えぬようになって、なをお

側にいるような温かい、なんともいえぬ不思議な法悦ともいうべき気持が一週間もつづいた。このたった一日の勝縁が元となり、ご遷化後に松本だらに、幾百となき青年の光明会がいくヶ所にも発興することとなるのであった。

それから越後路をご巡錫。

越後画会

越後では光明学園維持資金のために画会を起し、長岡羽賀氏が財務のお世話をした。越後より高崎、東京にご巡教。東京芝公園内千葉秀胤師方にて、師を助手として毎日毎日座敷一ぱいの絵絹に埋もれて画会頒布の仏画を、次から次と精根をつくして画かるのに、お食事の暇さえ惜まれていた。

その間に神奈川慶運寺、松戸、布鎌の会堂等の近県、東京市内の麻布光専寺、芝西応寺、赤坂浄土寺、浅草浄生院、また後には深川心行寺等に寸分の暇もなくご教化があつた。

大工職鈴木氏のごとき、かねて上人の勸化をこうむり念仏していると、日本橋の騒々しい屋内屋外一切の音はもちろん、見聞の境界、仏壇ご絵像までなくなつて、カラッとした心の空に大悲の如来様あるのみの心境となるので、ますます日々の労働に力があるのを歡喜踴躍して念仏精進していた。

法 語

「如来はことに大慈悲ふかくましますば、つねに衆生を想念し給うことしばしも、いとまはましまさぬにぞ、あくがるる子の憶念のなかに、如来のさながら聖き靈なるみすがたは、心眼の前にあらわれ給うことの、いかにありがたきぞや。」

「あなたのおつもりの中台の玉座に在ます靈性は、もと大ミオヤの王子に在ませども、いまだ幼にして全身心を征服し、統御する權威を得給わざるなり。されば宇宙の大ミオヤの光明をこうむりて、幼君をして即位せしめて全身心を統率して、ミオヤの光明の下に自己の使命を果すべく、無限の力を与えらるるように、常に聖名を称えて祈り給え。」

「一生懸命につとむべき勤め、行うべき行をしておれば、なす業に心があるから、寒さ暑さを感じずるいとまなく、そしてつとめられるだけ、つとめてつかれてくれば、またころよく、眠られる。」

自分のことをおもうと、いろ／＼の苦しみもなやみも、胸のすみの方からいくらか／＼湧き出してくるから、たゞ如来様の方をのみ、おもつてわれをわすれて念仏し、讃歌を歌つておれば、しらず／＼仏とはなれられぬようになる。仏とともにいる心が即ち一分の極楽である。」

愚衲の病

小石川一行院で宗教大学生有志のお別時に、ご不例であつたのを押してご指導下された。この時一信者お病を氣遣つてお見舞申したご返事に、

上人「願わくばすべての人々を大ミオヤの光明に浴せしめて、心の病氣を癒してやりたく存するのが愚衲の病にて、いつも休らうことなく熱をおこしていることにて候」。

十月下旬、当麻無量光寺にご巡教。基督教界にその名ある高田集藏氏上人に帰依し、同寺までは五香善光寺等にこもつて基督教の信仰のまま至心に念仏した。

（御遷化をいたむ「ひかりの教え垂れましゝ云々」の礼讃歌（光明聖歌集参照）は氏の作である）

それからまた東京、五香等ご巡教後、十二月例のごとく当麻に入りて越年なされた。

雑^{ざつ}鬧^{とう}の市中を長いこと黙々としてご歩行中、突然後の侍者の名を呼んで、上人「ここも光明の中ですね」。あとはまた低い声の称名が続くだけであつた。

道理では百千承知していて、少しもその氣分になれぬ者に、ただ一語で光明摂取の活き活きした実感を養い下さるのであつた。

機 関 雑 誌

ミオヤのひかり

この（大正八）年十一月十五日、月刊機関誌「ミオヤのひかり」を発刊された。菊版二十頁ばかりのもので、第一号の内容は「発刊の表白」、「発刊の趣旨」および講話「みおやの実在」は上人の筆になり、外二三の寄稿および雑報等であつた。千葉県松戸光明会を発行所として、会堂主任中村禪定師がもつぱら事務をとり、松戸の会員と全国結縁の人に配つた。もちろん大多数は施本であつた。

十二月、同県五香善光寺に入り、村民を集めて、五日間の授戒会を導かれた。

上人「この身今生に向つて度せずんば、またいづれの生に向つてか度せんとする。どうか至心に念仏して如来光明中に復活するように」と温容に慈悲を輝かして、

「急がねば日が暮るる」

と特に懇切なるご教示があつた。